

参加記

2007年10月6日、公開講座「フランス革命と歴史教育」が行われ、山岸拓郎氏、鳥越泰彦氏、日暮美奈子氏による以下のよう
な講演がなされた。

山岸氏の講演「フランス革命期の公教育案」は、革命期に議論された公教育に関する様々な計画のなかで、特に「タレーラン
報告」に焦点を当てたものである。タレーランは「ナポレオンの外交官」「ウィーン会議の立役者」として知られる人物である。し
かし山岸氏の講演では、タレーランは革命初期の重要な政治指導者の一人であることが示されており、従来のタレーラン像を
一部修正する必要があることを明らかにしている。1791年憲法に基づく支配体制を確立しようとする中で、タレーランは極め
て積極的な役割を果たしていた。彼が考える政治体制の中で、教育は重要な要素となっていた。「タレーラン報告」では、体制を
支え強化する手段として教育が位置づけられ、初等教育の無償化、宗教教育の緩和などが提案されていた。一方で、「タレーラ
ン報告」は1791年体制の申し子であるが故に、当時の様々な矛盾や限界を含むものであることも示されている。教育機会や卒
業後の進路に厳然たる格差が存在することを前提とし、また、女子教育が軽視されていることも、講演の中で紹介された。

鳥越氏の講演「歴史教育の中のフランス革命」は、日米の代表的な世界史教科書を比較検討したものであり、両国の歴史教育
観や教育制度の違いが示された。特にフランス革命については、生徒に革命の構造を把握させることを目指す日本と、独裁制
やナショナリズムといった言葉の定義付けを求めるアメリカの違いが浮き彫りにされている。革命そのものに関する記述では、
日本の高校世界史教科書がジャコバン派や公安委員会の役割をどちらかという肯定的に捉える傾向があるのに対し、アメリ
カでは恐怖政治やギロチンが詳しく取り上げられるなど、大きな違いがあることが紹介された。また講演の最後には、鳥越氏自
身がまだ部分的な調査しか出来ていないと前置きをした上で、そもそも中等教育までの段階ではフランス革命をほとんど教え
ていない国もあるということが紹介された。例示されたのはカナダ・オーストラリア・シンガポールの3か国だが、鳥越氏も述べ
ていたように、おそらくこの3か国だけが例外ということではないであろう。国や地域によって教育制度は違うため一概には言
えないが、やはりこの事実には驚かされた。

日暮氏の講演「ドイツの歴史教育とフランス革命」は、ドイツにおけるフランス革命受容の一例として、戦後ドイツにおける歴
史教育と、その中でフランス革命の扱いについて取り上げたものである。西ドイツの歴史教科書では、フランス革命とナポレ
オンに関する記述の約6割がナポレオン台頭以降に当てられており、その中でプロイセンの改革について詳しく扱われていた
ことが示された。フランス革命を素材にしてドイツ史を学ぶ、という姿勢であり、革命当時からフランスと隣接する地域特有の
事情が反映されていた。一方、東ドイツでは、社会主義国という事情から、「封建制社会→資本主義社会→共産主義社会」という
歴史の発展の中に、ブルジョワ革命であるフランス革命を位置づけることが重視されていた。フランス革命は人民の闘争であ
り、山岳派独裁は革命の完成と見なされ、1795年が革命の終了と考えられた。東西ドイツ統一後は基本的に旧西ドイツの制度
が採用されたが、歴史教育に関しては変化が現れたことが講演の中で示された。かつては東西ドイツ共に、ドイツは一つ、ある
いは、プロイセンの動向でドイツ全体の動向を代表させる、という姿勢がみられた。しかし東西統一後はプロイセンの相対化が
進み、各地域の多様性への眼差しが見られるようになったと、講演で示されていた。

今回の公開講座を振り返ると、内容が非常に多様であることに驚かされる。これまでの公開講座では、アジアや日本、ヨー
ロッパといった地域が設定され、そういった地域とフランス革命の関わりがテーマとされてきた。フランス革命そのものに深く踏
み込んだ第3回公開講座でも、「民衆」というテーマが設定されていた。そうした一連の公開講座に対し、今回のテーマは「歴史
教育」である。革命当時の教育問題に踏み込んだ講演もあれば、日米の歴史教育を比較検討する講演もあり、また、ドイツにお
ける歴史教育の展開を取り扱った講演もあった。今すぐに別々の大テーマを設定して、別々の公開講座を開催できそうな講演
が並んでいる。それだけ力が入った公開講座だったということであり、最後の公開講座として盛りだくさんの内容にしようと
した主催者側の意気込みが感じられる。ただ、一参加者として1つだけ惜まれることは、内容が多様であるために、若干、理解し
にくい部分があったということである。もつと講演と質疑に時間をかけることができればよかったのかもしれないが、時間的に
厳しい注文であろうか。司会者の説明によると「参照枠を提示する」という意図に基づく公開講座だったというが、講演者同士
の議論を通じて歴史教育観の比較検討が出来れば、さらに充実した公開講座となったのではないだろうか。

最後に、純粋な感想をひとつだけ述べたい。主催者側の発表では、今回の参加者は約140名だったとのことである。同時に開
催されていたベルンシュタイン文庫の展示会には約70名の来場者があったというから、単純に考えれば参加者の約半数は、展
示会にも足を運んでいることになる。こうした知的好奇心に積極的に応えることも、公開講座の重要な役割であるように感じ
られた。おそらく公開講座やシンポジウムだけでは、こうした企画に関心を寄せる人々の知的好奇心に応えることは難しいの
ではないだろうか。そうした観点からも、補助としての展示企画が重要な役割を果たした公開講座だったように思う。

小澤 康平

(専修大学大学院文学研究科修士課程)